

2007年3月6日

沖縄語研究家 船津好明

沖縄語普及協議会の書法の試行結果について（報告と提案）（4枚）

沖縄語の普及につきましては、同協議会を初め関係各位のご努力により成果をあげつつあり、ご同慶に堪えません。

さて、沖縄語の普及の気運と共に書法についての議論が高まっていることから、私どもは同協議会が公刊した「沖縄ぬ暮らしと昔話」の書法を実際に使用（試用）しましたところ、学習者から幾つかの意見が出されましたので、これを集約しました。同書は公刊物でありますので、以下に所見を交えて広く沖縄語普及関係者の方々に報告させていただきます。併せてその対策も提案させていただきます。いずれもこの書法が**過重な学習負担や子供の学力低下につながる部分**があることへの懸念を示したものです。この書法をお使いの各位におかれましても、ご検証のほど宜しくお願い申し上げます。

提案1、沖縄語の刊行物においては、すべての漢字に振り仮名を振ること。

同書法では、漢字のうち読みが共通語の読みと同じ場合は、振り仮名を振る必要はないとしています。振り仮名のない漢字は、どう読んでよいか解らないと学習者はいいます。例えば、「山」「海」とあった場合、学習者は、沖縄語と共通語の読みが同じかどうか解らないといいます。沖縄語の堪能な話者にとっては振り仮名は必要ないかもしれませんが、これから学ぼうとする人は読みに迷います。沖縄語としての読み方の解らない学習者が、「山」「海」の沖縄語としての正しい読み方を調べ出すことは大きな学習負担であるということが解りました。この書法では学習者は沖縄語を難しいと感じ、学習意欲がそがれ、ひいては学習を断念してしまいます。沖縄語は子供や若者、一般人の学習者に容易に読まれるのでなければ、普及は進みません。

過去、日本語の書法において、学校外での学習や読書の便宜のため、すべての漢字に振り仮名を振っていた時代があります。明治維新の後学校が普及しましたが、既に学齢を過ぎた大人達の多くは、字が読めたとしても振り仮名がなければ読書は困難でしたから、全漢字に仮名を振ったのです。このことは沖縄語の普及を考える今、学ぶべき例であると思います。よって、沖縄語が十分に普及するまでの間、

「沖縄語の刊行物においては、すべての漢字に振り仮名を振ること。」

を提案いたします。なお、私的な文については、振る振らないは自由とします。

提案2、漢字の振り仮名と送り仮名の関係を共通語の書法と整合させること。

例えば、共通語の「山は」に対して、同書法では沖縄語の口語体で「山^やまー」と書くことになっていますが、学習者は理解し難いといえます。漢字のあとに「ー」をつけてはいけない理由も解らないようです。「ー」は単なる記号ではなく、多音韻で直前の音により a、i、u、e、o、n の音となる一種の文字であり、これを用いることに異存はありません。単語の語頭以外ならどこでも使える筈です。

子供達は学校で国語を習っています。子供は分別感が育っていませんから、子供が国語の時間に誤って「山」の読み方を「や」とすると、学力が低いと評価されます。「山」は共通語でも沖縄語でも、「やま」と読むのが自然で、学習負担も軽微です。また、共通語の「山は」を沖縄語で「山^やまー」と書くと混同して「やま^やまー」と読まれることにもなります。「山^やまー」とするのが国語教育と整合しています。漢字に振り仮名を付けることによって、「ー」を「いち」と誤読されることはありません。

更に、沖縄語が上達すれば、琉歌など文語への関心が湧くのが普通で、文語への移行の円滑のためにも、「山」は口語文語を通して「やま」と読むのが自然です。文語的に「山^やや」と書くこととの関連からしても、口語体は「山^やまー」と書くのが自然です。「山^やあ」と書く人もいるほど、「山」を口語で「やま」と読むのは当然の事です。

もし、協議会の書法に従って、共通語の「山は」に対して、沖縄語の口語体だけ「山^やまー」と書くことを普及させるとすれば、学理が納得し難く、学習負担も非常に大きくなり、読み書き自体で一つの学問になってしまいます。それでは教える側も教わる側も大変な負担になります。

また、共通語の「犬」は読みの原形は「いん」、続く助詞によって「いぬ、いの」と漢字の読み方が変わります。語尾などを変えて単語の格が変わるのは、外国語には幾つもあります。共通語の「犬も」に対して、沖縄語の音が変わる部分の仮名を送ると、「犬ぬん」となりますが、共通語を知っている学習者には甚だ奇妙に思えるようです。また、子供に教えても、子供は物事の分別能力に乏しいため国語の時間に誤って「犬」の読み方を「い」とすると、学力低下のそしりを免れません。昔のように、学力低下の原因が沖縄語にあると非難されては、普及どころではありません。

一般に漢字の読みは複数ありますが、「犬」は文中で「いん、いぬ、いの」と読むのが沖縄語の特徴で、共通語の音韻とも整合し、学理も合理的、共通語の知識との相乗効果も期待でき、これを理解することがより高い言語素養につながると思います。よって、

「漢字の振り仮名と送り仮名の関係を共通語の書法と整合させること。」

を提案いたします。なお、共通語の書法との整合は、沖縄語が共通語に従属するという意味ではなく、既存知識を活用して学習負担を軽くしようという趣旨です。

提案3、漢字の選択は、共通語との間の音韻関係と字義の一致を優先させ、従来使用が排他的に一般化していて、これに当てはまらない漢字は慣用として引き続き使用すること。

例えば、沖縄語の「がっていん」の漢字は、同書法では「合点」ではなく、「承諾」、^{がっていん}「了承」の方がよいとしていますが、それなら^{がっていん}「納得」、^{がっていん}「了解」、^{がっていん}「同意」など、共通語の同義の漢字はたくさんあります。我々は沖縄語の世界にいます。共通語は関係語として、および既存知識として沖縄語の学習を助ける点ではよいとしても、沖縄語の上に位置するものではありません。沖縄語のことは沖縄語として考えるべきです。

沖縄語の「がっていん」は^{がっていん}「合点」とするのが最善で、音韻の対応もよく、学習負担は最も軽いと思います。「合点」を沖縄語で「がっていん」、共通語で「がってん」と読み分けるのは、高い言語素養です。「承諾」、「了承」、「納得」、「了解」、「同意」などは、「がっていん」の共通語への翻訳であって、沖縄語の学習者に教える漢字としては適しません。沖縄語が未熟な子供が、共通語と混同して「承諾」などを「がってん」と読むと、学力の低下とみなされます。そう読むのは文学の領域です。

一方、沖縄語の中で既に使われている漢字の中には、上のような考え方に当てはまらないものがあります。例えば、「ちゅ」、「ちゅ」は従来「人」を用いています。これは沖縄語の慣用と考えます。これを否定すると別のより大きな問題が生じます。学習者には初めだけ学習負担がかかりますが、止むをえません。何を慣用とし、何を慣用としないかの線引きは困難ですが、いわゆる当て字は学習者が迷うだけですから、無闇に増やさないことです。このことは共通語の書法の歴史が如実に物語っています。以上によって、

「漢字の選択は、共通語との間の音韻関係と字義の一致を優先させ、従来使用が排他的に一般化していて、これに当てはまらない漢字は慣用として引き続き使用すること。」

を提案いたします。

上記のほか、声門破裂音、拗促音の表記などについても、正しく筆記しにくいなどの意見があります。詳しくは追加してご報告いたします。

連絡先 〒1870002 東京都小平市花小金井 2-6-1

船津好明

明星大学経済学部教授・理学博士（東京都日野市）

法政大学沖縄文化研究所国内研究員（沖縄語の表記法）

沖縄ファンクラブ常任理事（沖縄語研究家）

沖縄語を話す会会員（沖縄語の話者）

元日本語学会会員（日本語の表記法）

元沖縄言語研究センター会員（沖縄語の表記法）

元沖縄総合事務局次長（1983 - 1985）

沖縄語関係 著書 1、論文等多数

Tel/Fax 042-467-1273

Email funatsu@mvf.biglobe.ne.jp